単元の評価規準の作成のポイント（小学校国語科を例にして）

Step1
単元で取り上げる指導事項の確認

Step2
単元の目標と言語活動の設定

・（1）（2）は、文末を「～できる。」
・（3）は、文末を「～しようとする。」

Step3
単元の評価規準の設定

・文末を「～している。」

単元名
夏休みの思い出を報告しよう
第２学年　Ａ話すこと・聞くこと

内容のまとまり
第２学年
〔知識及び技能〕（１）言葉の特徴や使い方に関する事項
〔思考力、判断力、表現力〕「A 話すこと・聞くこと」

1　単元の目標

（1）　身近なことを表す語句の量を増し、話の中で使うとともに、語彙を豊かにすることができる。　〔知識及び技能〕（1）オ
（2）　相手に伝わるように、行動したことや経験したことに基づいて、話す事柄の順序を考えることができる。　〔思考力、判断力、表現力等〕Ａ（1）イ
（3）　言葉がもつよさを感じるとともに、楽しんで読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。　〔学びに向かう力、人間性等〕

目標は「学びに向かう力、人間性等」

2　単元で取り上げる言語活動

夏休みの思い出について報告したり、それらを聞いて感想を記述したりする。
〔関連：言語活動例ア〕

3　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・　身近なことを表す語句の量を増し、話の中で使っているとともに、語彙を豊かにしている。〔（1）オ〕	・　「話すこと・聞くこと」において、相手に伝わるように、行動したことや経験したことに基づいて、話す事柄の順序を考えている。〔A（1）イ〕 ・　「話すこと・聞くこと」において、話し手が知らせたいことに落とさないように聞き、話の内容を捉えて感想をもっている。〔A（1）エ〕	・　進んで(1)、相手に伝わるように話す事柄の順序を考え(3)、学習の見通しをもって(2)報告しようとしている(4)。

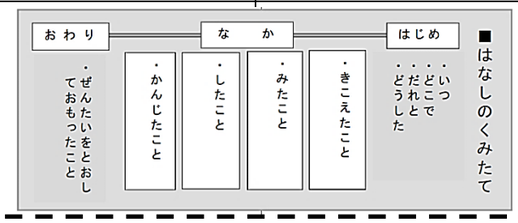
国語では、指導する一領域を「（領域名）において」と明記する。

1.粘り強さ＜積極的に、進んで、粘り強く等＞
2.自らの学習の調整＜学習の見通しをもって、学習に沿って、今までの学習を生かして等＞
3.「知識・技能」や「思考・判断・表現」において、特に粘り強さを発揮してほしい内容を明確にする。
4.自らの学習の調整が必要となる具体的な言語活動を明確にする。

Step4
単元の指導と評価の計画の決定

・単元のどの段階でどの評価規準に基づいて評価するかを決定する。

4　指導と評価の計画（全７時間）

時	学　習　活　動	指導上の留意点	評価規準・評価方法等
1	○夏休みの思い出を報告するという学習の見通しをもつ。 ○夏休みの思い出を複数想起し、その中から友達に一番報告したいことを選ぶ。	・児童の伝えたいという思いを引き出したり、教師が自身の思い出を紹介したりして、学習への意欲を高め、学習の見通しがもてるようにする。 ・夏休みの思い出の中から伝えたい思い出の強さを手掛かりにして、一つを選ぶようにする。	記録に残す評価と改善に生かす評価を明確に区別する等、工夫する。 「評価する観点」「評価方法」「おおむね満足できる状況（B）」を示す。
2			〔知・技①〕 カード ・事物を表す言葉、経験したことを表す言葉、色や形を表す言葉の文意に沿った活用状況の確認
以下は省略			

Step5
評価の実際と手立ての想定

・「おおむね満足できる」状況（B）の例、「努力を要する」状況（C）への手立てを想定する。

参考：文部科学省「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料

※教科ごとの評価のポイント（小学校）を４月に指導課 HP にアップする予定です。ぜひ、ご覧ください。

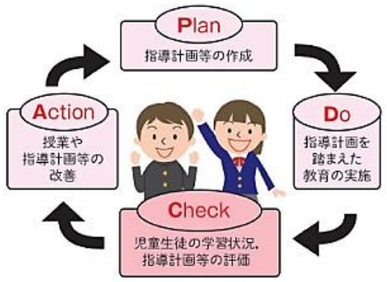
新学習指導要領の実施に伴う学習評価の在り方について

学習評価の基本的な考え方

学習評価は、学校における教育活動に関し、児童生徒の学習状況を評価するものです。「児童生徒にどういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、**教師が指導の改善を図る**とともに、**児童生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにする**ためにも、学習評価の在り方は重要であり、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性のある取組を進めることが求められます。

カリキュラム・マネジメントの一環としての指導と評価

「学習指導」と「学習評価」は学校の教育活動の根幹であり、教育課程に基づいて組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図る「カリキュラム・マネジメント」の中核的な役割を担っています。



主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善と評価

指導と評価の一体化を図るためには、児童生徒一人一人の学習の成立を促すための評価という視点を一層重視することによって、教師が自ら指導のねらいに応じて授業の中での児童生徒の学びを振り返り、学習や指導に生かしていくというサイクルが大切です。各教科等における資質・能力を確実に育成する上で、学習評価は重要な役割を担っています。

各教科における評価の基本構造

「学びに向かう力、人間性等」には
①　「主体的に学習に取り組む態度」として観点別評価を通じて見取ることができる部分
②　観点別評価にはなじまず、個人内評価を通じて見取る部分
の２つがあります。

目標　学習指導要領に示す目標や内容

知識及び技能　／　思考力、判断力、表現力等　／　学びに向かう力、人間性等

「目標」と「評価」では、表記が異なります。

評価

知識・技能
・各教科等における学習の過程を通した知識及び技能の習得状況を評価する。
・既有の知識及び技能と関連付けたり活用したりする中で、他の学習や生活の場面でも活用できる程度に概念等を理解したり、技能を習得したりしているかを評価する。

思考・判断・表現
・各教科等の知識及び技能を活用して課題を解決する等のために必要な思考力、判断力、表現力等を身に付けているかどうかを評価する。

①　主体的に学習に取り組む態度
・知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりするために「粘り強い取組を行おうとする側面」と、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど「自らの学習を調整しながら学ぼうとしているかという意思的な側面」から評価する。

②　感性、思いやり　など
・児童生徒が学習したことの意義や価値を実感できるよう、日々の教育活動の中で児童生徒に伝えることが重要。
・特に「感性や思いやり」など児童生徒一人一人のよい点や可能性、進歩の状況などを積極的に評価し児童生徒に伝えることが重要。

観点別学習状況評価の各観点
●観点ごとに評価し、生徒の学習状況を分析的に捉えるもの
●観点ごとに ABC の３段階で評価

評　　定
●観点別学習状況の評価の結果を総括するもの
●５段階で評価（小学校は３段階。小学校低学年は行わない）

個人内評価
●観点別学習状況の評価や評定には示しきれない児童生徒の一人一人のよい点や可能性、進歩の状況について評価するもの

参考：「学習評価の在り方ハンドブック（小・中学校編）」（令和元年６月　文部科学省　国立教育政策研究所）

Q　どのように評価規準を作成するのですか？

各学校においては、
「内容のまとまりごとの評価規準」の考え方を踏まえて、学習評価を行う際の評価規準を作成します。

学習指導要領では、各教科等の「第２　各学年（分野）の目標及び内容」の「２　内容」において、「内容のまとまり」ごとに育成を目指す資質・能力が示されています。

このため、「２　内容」の記載がそのまま学習指導の目標となり、児童生徒が資質・能力を身に付けた状況を表すために、「２内容」の記載事項の文末を「～すること」から「～している」と変換したもの等が「内容のまとまりごとの評価規準」です。

「単元の目標」を立てる際には、学習指導要領解説を参考にして各学校において育成したい資質・能力を明確化してください。
そして、「内容のまとまりごとの評価規準」の考え方等を踏まえて「単元の評価規準」を作成します。

単元（題材）の目標及び評価規準の関係性についてのイメージ図

学習指導要領の目標及び内容
「２内容」～すること

「内容のまとまりごとの評価規準」
～している

各学校において
授業で育成を目指す
資質・能力を明確化する。

単元の目標

単元の評価規準

参考：文部科学省「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料

Q　学習評価を行う上で、留意することは何ですか？

①評価の方針等を児童生徒と共有する

必要に応じて学習評価の方針を事前に児童生徒と共有する場面を設け、学習評価の妥当性や信頼性を高めるとともに、児童生徒自身に学習の見通しをもたせる。（※児童生徒の発達の段階を踏まえ、適切な工夫が求められる。）

②観点別学習状況の評価を行う場面の精選

観点別学習状況の評価に係る記録は、毎回の授業ではなく、単元や題材などの内容や時間のまとまりごとに行うなど、評価場面を精選する。
（※日々の授業における児童生徒の学習状況を適宜把握して指導の改善に生かすことに重点を置くことが重要。）

③外部試験や検定等の学習評価への利用（指導や評価の改善のための利用）

外部試験や検定等（全国学力・学習状況調査等）の結果を、指導や評価の改善につなげることも重要。
（※外部試験や検定等は、学習指導要領の目標に準拠したものでない場合や内容を網羅的に扱うものでない場合があることから、教師が行う学習評価の補完材料である。）

参考：文部科学省　児童生徒の学習評価の在り方について（中央審議会報告）

Q　どのような方法で評価すればよいですか？

観　点	何を評価するか	評価方法（例）
知識・技能	・個別の知識及び技能の習得状況。 ・他の学習や生活の場面でも活用できる程度に概念等を理解したり、技能を習得したりしているか。	○ペーパーテストにおいて、事実的な知識の習得を問う問題と、知識の概念的な理解を問う問題とのバランスに配慮する。 ○「文章による説明」「観察・実験」「式やグラフで表現」など、知識や技能を用いる場面を設ける。
思考・判断・表現	・知識及び技能を活用して課題を解決する等のために必要な思考力、判断力、表現力等を身に付けているかどうか。	○ペーパーテストのみならず、「論述やレポートの作成」「発表」「話合い」「作品の制作や表現」等の多様な活動を取り入れたり、それらを集めたポートフォリオを活用したりする。
主体的に学習に取り組む態度	・知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組の中で、自ら学習を調整しようとしているかどうか。	○「ノートやレポート等における記述」「授業中の発言」「教師による行動観察」「児童生徒による自己評価や相互評価」等の状況を教師が評価を行う際に考慮する材料として用いる。

参考：「学習評価の在り方ハンドブック（小・中学校編）」（令和元年６月　文部科学省　国立教育政策研究所）

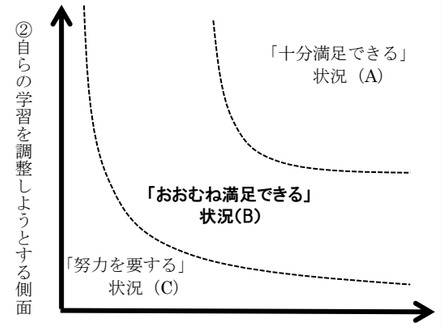
Q　「主体的に学習に取り組む態度」と「関心・意欲・態度」の違いは何ですか？

○趣旨は同じですが、「関心・意欲・態度」の評価における課題として、「学校や教師の状況によっては、挙手の回数や毎時間ノートを取っているかなど、性格や行動面の傾向が一時的に表出された場面を捉える評価であるような誤解が払拭し切れていない」ということが指摘されました。（平成３１年１月　文部科学省中央教育審議会「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」）

「主体的に学習に取り組む態度」の評価のイメージ

①　粘り強い取組を行おうとする側面
知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力などを身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面

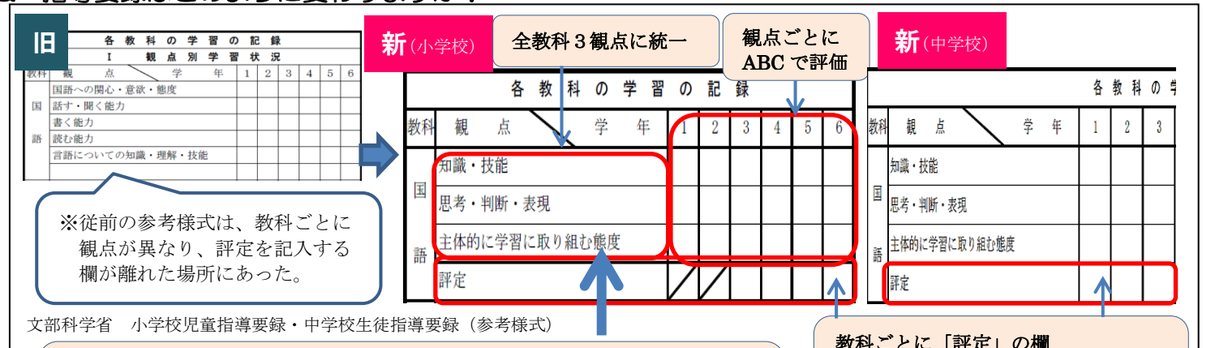
②　自らの学習を調整しようとする側面
①を行う中で、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤する等、自らの学習を調整しようとする側面



※　①と②は相互に関わり合いながら立ち現れるものであり、どちらか一方だけが現れるものではありません。

参考：「学習評価の在り方ハンドブック（小・中学校編）」（令和元年６月　文部科学省　国立教育政策研究所）

Q　指導要録はどのように変わりますか？



※従前の参考様式は、教科ごとに観点が異なり、評定を記入する欄が離れた場所にあった。

文部科学省　小学校児童指導要録・中学校生徒指導要録（参考様式）

教科ごとに「評定」の欄
※小学校は３段階（低学年は行わない）
※中学校は５段階

※　「主体的に学習に取組む態度」の学習の調整が知識及び技能の習得などに結び付いていない場合には、教師が学習の進め方を適切に指導することが求められます。

参考：「学習評価の在り方ハンドブック（小・中学校編）」（令和元年６月　文部科学省　国立教育政策研究所）